様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年６月１５日現在

機関番号：３２６１４
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2009～2012
課題番号：２１７２０１６２
研究課題名（和文）　古代語従属節の変化に関する研究

研究課題名（英文）　Studies on the Changes of the Subordinate Clause of Old Japanese

研究代表者
吉田　永弘（YOSHIDA　NAGAHIRO）
國學院大學・文学部・准教授
研究者番号：30363906

研究成果の概要（和文）：目的と原因を表すタメニを採り上げて奈良時代から江戸時代までの資料を調査した。その結果、以下のことが明らかになった。(1)目的用法は「セム（ガ）タメニ」の構文から「スルタメニ」の構文に変化すること。(2)原因用法は「スル（ガ）タメニ」の構文から「シタタメニ」の構文に変化すること。(3)変化の転換期は 17 世紀頃であること。(4)事態の実現の捉え方が変化したことが変化の要因となったこと。

研究成果の概要（英文）：This paper reviews the history of “tameni”, express purpose and cause, through Nara era to Edo era. The result suggests followings; (1) Purpose usage, “semu-ga-tameni” construction shifted to “suru-tameni” construction. (2) Cause usage, “suru-ga-tameni” construction shifted to “shita-tameni” construction. (3) The change happened in the seventeenth century. (4) The factor of change is due to perception change on realization of situation.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	1,400,000	420,000	1,820,000
２０１０年度	900,000	270,000	1,170,000
２０１１年度	400,000	120,000	520,000
２０１２年度	400,000	120,000	520,000
年度			
総　計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・日本語学
キーワード：従属節・文体史・目的表現・中世語・連体法・原因理由表現・文法史・タメニ

１．研究開始当初の背景

古代語の従属節の変遷を扱う研究には、阪倉篤義『日本語表現の流れ』(岩波書店、1993 年）を始めとして、山口堯二『日本語接続法史論』（和泉書院、1996 年）、小林賢次『日本語条件表現史の研究』（ひつじ書房、1996 年）、小林千草『中世のことばと資料』（武蔵野書院、1994 年）などの大著があり、従属節の変遷に関する大きな流れは明らかにされている。それらの研究では、おもに各時代ごとの接続助詞の用法を記述することに重点を置くことで歴史の流れを描いてきた。しかし、それらの研究では、新しく生まれた形式がどのようにして接続助詞となったのか、また、なぜ接続助詞化を果たしたのかという視点が欠けていた。そのため、本研究の研究代表者は、中世に新たに原因理由を表す形式として使われるようになった「ほどに」「によって」に着目して、「ホドニ小史―原因理由を表す用法の成立―」(『国語学』51 巻３号、

2000 年)、「平家物語のホドニ―語法の新旧」（国学院大学『国語研究』64 号、2001)、「中世日本語の因果性接続助詞の消長―ニヨッテの接続助詞化を中心に―」(青木博史編『日本語の構造変化と文法化』ひつじ書房、2007 年)、「接続助詞ニヨッテの源流」(『国学院雑誌』108 巻 11 号、2007 年）の各論文によって、接続助詞化の時期・過程・要因を考察し、日本語文法史の流れのなかで変化を捉えようと努めてきた。その過程で、文体差に考慮する必要があること、また、原因理由表現にかかわる形式相互の関係に考慮する必要があることが残された課題として明らかになった。以上が本研究開始当初の背景である。

２．研究の目的

前節で述べた残された課題に対して、従属節を構成する形式をとりあげ、文体差に配慮して歴史的変遷を描き、変化の要因を考察することを目的とした。具体的には、「ために」が構成する文を中心に考察することにした。「ために」は、現代語では「本を買ったために昼食代がなくなった」という原因理由を表す他に、「本を買うために神田へ出かけた」という目的も表す。原因理由表現と目的表現は、因果関係にかかわるという点で共通するが、「ために」はそのどちらの表現にもかかわる形式という点で注目される。従来、現代語の「ために」に関する論文は見られるが、「ために」の歴史的な変遷を扱った研究は見られない。そこで、上代から近世の用法の変遷を記述し、どのような変化を遂げているのか、変化が見られる場合にはその要因は何か、という点を明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

(1)　上代から近世に至る資料を文体差を考慮に入れて選定し、その資料からタメニの使用例を抜き出し、用法を吟味した。

選定した資料は以下の通り。

万葉集・金光明最勝王経古点・九暦・古今集・土左日記・三宝絵詞・雲州往来・蜻蛉日記・枕草子・源氏物語・和泉式部日記・栄花物語・更級日記・大鏡・今昔物語集・法華百座聞書抄・古本説話集・仏教説話集・打聞集・三教指帰注・往生要集・梁塵秘抄・新古今集・方丈記・宇治拾遺物語・古今著聞集・沙石集・徒然草・延慶本平家物語・高野本平家物語・竹柏園本平家物語・天草版平家物語・仮名書き法華経・応永二十七年本論語抄・土井本太平記・舞の本・史記抄・中華若木詩抄・中興禅林風月集抄・御伽草子・エソポのハブラス・天草本金句集・ばうちずもの授けやう・おらしよの飜譯・どちりなきりしたん・羅葡日対訳辞書・ぎやどぺかどる・日葡辞書・虎明本狂言・狂言六義・三河物語・醒睡笑・捷解新語・好色伝受・日本永代蔵・好色五人女・理屈物語・驢鞍橋・難波鉦・近松世話物・近松時代物・折たく柴の記・あゆひ抄・雨月物語・東海道中膝栗毛・蘭東事始・浮世風呂・南総里見八犬伝

(2)　収集した用例を目的用法と原因用法に分類し、その構文的特徴を探った。目的用法と原因用法に分ける判定基準は、「ために」節と主節の時間関係、および、「ために」節の述語の意味という２つの基準で判定した。すなわち、「ために」節の事態が主節より後で、「ために」節の述語に意志性が認められた場合に目的用法と判定し、「ために」節の事態が主節より先であれば原因用法と判定した。たとえば、「本を買うために神田へ出かけた」は、「出かけた」後に「買う」という事態が生じるように、「ために」節と主節との時間関係が「後―先」であり、また、「買う」には意志性が認められるので目的表現と判定し、「本を買ったために昼食代がなくなった」は、「買った」後に「なくなった」という事態が生じるように、「ために」節と主節との時間関係が「先―後」なので原因表現と判定した。

(3)　変化の時期を特定し、その要因について他の文法変化を考慮に入れて考察した。

４．研究成果

(1)　古代語のタメニは漢文調・文語体の資料に用例が偏ること。

まず、上代から中古の 30 資料における使用状況を調査すると、「ために」が観察された資料は、万葉集・金光明最勝王経古点・三宝絵詞・雲州往来・源氏物語・大鏡・今昔物語集・法華百座聞書抄・古本説話集・仏教説話集・打聞集・三教指帰注・往生要集・宇治拾遺物語・古今著聞集・沙石集・徒然草・延慶本平家物語・高野本平家物語・仮名書き法華経の 20 資料である。一方、「ために」の使用例がなかったのは、古今集・土左日記・蜻蛉日記・枕草子・和泉式部日記・栄花物語・更級日記・梁塵秘抄・新古今集・方丈記の 10 資料である。

したがって、和文資料ではほとんど用いられず、訓点資料・変体漢文資料をはじめとした漢文調の資料に使用例が認められる。

なお、「ために」が観察された資料のなかに和文資料の源氏物語があるが、使用例はわずかに１例である。また、今昔物語集は巻によって文体が異なるが、漢文調の強い巻１～20 で 357 例、和文調の強い巻 22～31 で 36 例という使用数であるところからも、「ために」が漢文調の資料で用いられる形式であることが明らかである。

(2)　目的用法が多く、原因用法は希である

こと。
上記使用例のある 20 資料で、目的表現と判定される例は、577 例。原因表現と判定される例は、27 例である。古代語の「ために」節は目的表現を表す形式として用いられていたと考えてよい。
この状況は近世まで調査範囲を広げても同様である。中世後期から近世の「ために」が観察された 32 資料（土井本太平記・舞の本・史記抄・中華若木詩抄・中興禅林風月集抄・御伽草子・エソポのハブラス・天草本金句集・ばうちずもの授けやう・どちりなきりしたん・羅葡日対訳辞書・ぎやどぺかどる・日葡辞書・虎明本狂言・狂言六義・三河物語・醒睡笑・捷解新語・好色伝受・日本永代蔵・好色五人女・理屈物語・驢鞍橋・難波鉦・近松世話物・近松時代物・折たく柴の記・雨月物語・東海道中膝栗毛・蘭東事始・浮世風呂・南総里見八犬伝）における使用例は、目的表現と判定される例は 1143 例、原因表現と判定される例は 28 例で、「ために」は目的表現専用の形式と言ってよい使用状況である。
さらに時代を降らせて、「太陽コーパス」によって、1901 年の「口語体」を検索・分類したところ、目的表現と判定される例は 43 例、原因表現と判定される例は 52 例見られ、拮抗するようになる。1925 年の「口語体」を検索・分類すると、目的表現と判定される例が 228 例に対して、原因表現と判定される例は 346 例と目的表現を大幅に上回る。
以上の調査によって、「ために」が原因を表す用法として用いられるようになるのは近代になってからということが明らかになった。原因用法は、「ゆゑ」などの他の形式が使われていたことが要因だと考えられる。

(3)　目的用法は「意志性述語＋む＋（が）＋ために」の構文、原因用法は「無標形＋ために」の構文を構成すること。
目的用法の例は次のような例である。「天竺ニ一人の人有テ、財ヲ買ハムガ為ニ、銭五千両ヲ子ニ令持テ隣国ニ遣ル。」（今昔物語集・巻９）。この例の「買はむがために」のように、「むがために」の形式を取り、「買う」は意志性述語である。一方、原因用法の例は次のような例である。「「猶モ信ゼヌ為ニ、或ハ、経論ノ明ナル文ヲヒキ、或ハ先賢ノ残セル誡ヲノス。」（沙石集）。この例の「信ぜぬ」は「む」のつかない形式（これを無標形と呼ぶ）である。このように、「ために」節の述語に「む」が現れるか否かで、目的用法か原因用法かの違いが見られた。

(4)　中世後期から近世にかけて、目的用法に「意志性述語の無標形＋タメニ」の構文、原因用法に「意志性述語＋過去辞＋タメニ」の構文が現れて、現代語と同様になること。
中世末期の『日葡辞書』の例文に目的用法が見られるが、「詩を作るために人の集まるを詩会といふ」とあって「作るために」のように「む」を用いない無標形で表している。一方、原因用法に過去辞が見られる例として、近世の『折たく柴の記』の「銀改め造りしがために、重秀わかち得し所は、金およそ二十六万両に余り」のような例がある。これは現代語の「た」相当の表現であり、これらの例が現れたことによって、構文的には現代語と同様になった。ただし、「ている」を受けて原因を表す例が確認されるのは近代になってからである。「太陽コーパス」では「東地中海の要所に位置してゐる為めに、歴史上頗る重要な関係を有してゐたのであります」のような例が検出できる。

(5)　中世後期から近世にかけて、推量辞のムが衰退すること。
「ために」構文の変化を起こした要因として、まず従属節に用いられる「む」の衰退が挙げられる。従来、従属節に用いられた「む」は仮定・婉曲用法などと呼ばれているが、本質的には未実現を表す形式として用いられていた。中世後期の文語体の平家物語で「弟ノ七郎ガ見ン前ヘニテ」（百二十句本平家物語）とあるところを、キリシタンの口語訳した平家物語では「弟の七郎が見る前で」のように、「む（ン）」を除いた形で表しているところがある。このように「む」が衰退し、その代わりに無標形が用いられるようになった。この変化が「ために」構文に影響を及ぼし、「む＋ために」の構文から「無標形＋ために」の構文に変化した要因だと考えられる。
また、「む」の衰退は従属節だけではなく、主節にも起きたと考えられる。古代語では意志を表す場合に「む」が必須であったが、近世になると「かい物のため京へのぼる」（近松・心中天の網島）のように、「む（う）」のない無標形で意志を表している。このように、近世には現代語と同様の表現法ができるようになった。

(6)事態の実現・未実現に対する把握の仕方が変化していること。
「ために」構文の変化の要因となった「む」の衰退は、古代語から近代語への大きな変化となる事態把握の変化が背景にあると考えられる。例えば、「已然形＋ば」の形は古代語では確定条件を表していたが、近世では「今宵一夜を越せば、明日よりは自由なり」（日本永代蔵）のように、まだ実現していない仮定条件にも用いられるようになる。また、仮定条件を表す「未然形＋ば」や「終止形＋とも」は「むば」「むとも」のように、「む」を受けることはできなかったが、近世になると、「なされうば」（虎明本狂言）の「うば」

や、「明るかろうとも」（驢鞍橋）の「うとも」のように、推量の「う」を受けた例が現れる。これは、仮定の表し方が変化したことに伴って「う」を過剰に用いて生じた語形だと考えられる。さらに、古代語には過去・完了にかかわる形式が「き」「けり」「つ」「ぬ」「たり」「り」など複数の形式が見られたが、やがて「た」に収斂され、実現の表し方にも変化がある。要するに、中世後期を画期として、実現・未実現という事態把握と形式が密接に関わっていた時代からそうでない時代へと変化したのである。

(7)　事態の実現・未実現に対する把握の仕方が変化したことは、従属節の変化を誘発するにとどまらず、他の文法形式にも反映していること。

上記の見方は条件表現史だけに適用できるのではなく、他の表現形式の変化の要因ともなりうることを示した。

具体的には可能の「る・らる」の肯定表現で用いられる場合に着目した。可能の「る・らる」は中古では否定表現でしか用いられず、肯定表現で用いられるようになるのは中世からと言われている。それを検証して、肯定表現での用いられ方を４種に分けた。Ⅰ個別的事態の実現（「やうやうかう起きゐられなどしはべるが」『源氏物語』）、Ⅱ恒常的事態（「まゐりつどふ人の有様ども見くださるるかたなり」『源氏物語』）、Ⅲ一般論（「冬はいかなるところにも住まる」『徒然草』）、Ⅳ未実現の個別的事態（「然ども此比になつて少し飛ばるるかと思ふ也」『驢鞍橋』）。このうち、Ⅰ～Ⅲが実現領域、Ⅳが未実現領域の事態で、Ⅰ～Ⅲが中世以前に見られるのに対して、Ⅳは近世に現れる。つまり、近世を境に、それまで表すことのできなかった未実現の事態に対する可能を表せるようになった。これは、実現・未実現に対する事態把握の変化が背景にあることによって説明できるものと考える。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）
〔雑誌論文〕（計３件）
①吉田永弘「平家物語と日本語史」説林 No.60、愛知県立大学国文学会、2012、53-68、査読無

②吉田永弘「タメニ構文の変遷―ムの時代から無標の時代へ―」青木博史編『日本語文法の歴史と変化』くろしお出版、2011、89-117、査読無

③吉田永弘「屋代本平家物語巻十一の性格」千明守編『平家物語の多角的研究』ひつじ書房、2011、45-61、査読無

〔学会発表〕（計４件）
①吉田永弘「「る・らる」における肯定可能の展開」日本語学会 2012 年度春季大会、2012 年 5 月 20 日、千葉大学

②吉田永弘「「る・らる」による可能表現」国立国語研究所共同プロジェクト・日本語文法の歴史的研究（独創・発展型）研究発表会、2011 年 8 月 30 日、九州大学博多駅オフィス

③吉田永弘「名詞と敬語」愛知県立大学国文学会、2010 年 5 月 8 日、 愛知県立大学

④吉田永弘「古代語のタメニ構文とその変遷」中部日本・日本語学研究会、2009 年 10 月 17 日、刈谷市産業振興センター

６．研究組織
(1)研究代表者
吉田　永弘（YOSHIDA　NAGAHIRO）
國學院大學・文学部・准教授
研究者番号：30363906

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし